（９）那須地域の歴史について

想定課題

国会等の移転先には、それにふさわしい風土・土地柄が必要と思われるが、那須地域はどうか。

■対応方向

国会等移転審議会の総合評価において、「栃木・福島地域」が１位、「栃木地域」単独、つまり那須地域が２位という結果でした。

総合評価に当たっては、広範かつ多岐にわたる１６の評価項目について詳細な評価が行われ、那須地域は各項目で高い評価を受けています。那須地域の中心を形成する那須野ヶ原の風土・土地柄は、今回の評価の対象とはなりませんでしたが、国会等の移転先として那須地域が持っている優れた適地性の一つであると考えられます。

那須野ヶ原は、扇状地であるため水が地下に浸透してしまい、地下水は豊富な反面、江戸時代以前は極めて表流水の乏しい地域であり、あまり人が住んでいませんでした。

本格的な開発は、明治時代以降の、郷土の先達矢板武・印南丈作や、大山巌、西郷従道、松方正義、青木周蔵、山縣有朋、戸田氏共、品川弥二郎らの元勲たちの大農場方式による入植・開拓からであり、この開拓を支えたのが、那須疏水の開削でした。

那須疏水は、明治１８年に当時の明治政府が土木局の予算の１０分の１に当たる約１０万円の経費を投入して国の直轄事業として開削され、16.3㎞の本幹が約５ヶ月（１日当たり約１００m）という驚異的なスピードで開削され、福島県の安積疏水、京都府の琵琶湖疏水とともに、日本の３大疏水と言われています。

この那須疏水も、１００年を経過した現在は周囲の自然景観に溶け込んでおり、今後のまちづくりの生きた教本のように感じられます。

このように、那須地域は、日本が近代国家として生まれ変わった明治時代の初期の、新しい国づくりの意欲に燃えた、当時の為政者たちの国づくりのロマンが今なお息づいている、そういう品格のある土地柄です。

２１世紀に向かい、新しい時代を拓こうとする国会等移転の移転先地には、このような風土・土地柄である那須地域こそがふさわしいのではないかと思われます。